

## 星の草原

米司花音

王冠がある

その円環のなかに誰にも知られぬ王国がある

青々とした草原は波深くそよぐ

カルデラ湖に衛星が幾つも映って

それらもいつしか墜ち

鏡の星座は刻々と変わっていく

海の一粒が燃える八重の遠かた

私にしか見えない国がある

霧に包まれ草を食む馬がいる

柔らかな弾力を持つ草の食感を確かに受け取ることが出来る

彼らの耳が一斉に後ろを向き

汽笛が響いてくることに気が付く

馬は既に丘を駆け下りはじめ、すれ違う

彼らの息遣いを受ける

その美しさ

道の先に霧は濃くなって

たまらず振り返ったが

尻尾は大きく揺れて消えてしまった

Alpenglühén

霧を割って地平線から太陽の円盤が現れる

赫赫たる山頂に宙の風の清々しさ

骨壺の冷たさ

成長しつづける壁を見つめる

わたしはそれが何者なのか判断しかねている

触れても尋ねても壊そうとしても干渉できない

その中は満ちている

ペーパームーン

ペッパームーン

ハロウィーンも間近に迫ったあの日の夜はとても冷たい雨が降っていた。走る道すがら頭蓋の中まで雨が打ちつけ、あなたの肩の細さと握りしめた手の硬さばかりが強く印象に残った。けれどこうして風に吹かれて思い出されるのは、黒い煮豆の美味しかったこと。焼酎を呑む父と祖父を見る目つきの面白さ。わたしを呼ぶ声の優しい響き。

つないだ手のそのやわらかさ

胸にピンクのガーベラ

耳飾りに白のガーベラ

そして髪にはオレンジのガーベラ挿して

晴れ晴れと風に吹かれて揺れている

歌と踊りに満ちたあなただけの王国がこの冥い星のどこかで生きている